

# 日本山岳写真協会 選抜展 「それぞれの山」

日 時／平成26年3月20日(木)～26日(水) 会 場／ポートレートギャラリー

1	烈風の創造	岡 孝 雄
活火山である那須・茶臼岳。特に無間地獄一帯の冬季は、寒気と強風が噴煙を凍らせ岩氷を発達させる。無雪期には想像もできない壮絶な景観の中に美を求め何度も足を運ぶ。		
2	弓折岳・冬から春へ	上 ケ 平 裕 彦
5月初め、「ガラガラズシーン」と轟く雪崩に怯えつつ、スキー以外はトレースのないきつい登りを黙々と進む。ここで大自然と対峙する人はちっぽけな存在だ。6月初め、ようやく春山らしくなった弓折尾根。夏山シーズンまで残り1ヶ月、待ち遠しい高嶺の花々に思いを馳せつつ孤独を楽しめる短い時期でもある。		
3	冬晴れのおくりもの	鬼 頭 剛
前日までの吹雪が嘘のように晴れ、クリスタルスノーの雪原は輝き、大雪山旭岳の雄姿が神々しい。姿見ノ池やすり鉢池では巨大なシュカブラが目をつけた。この時期は地獄谷の噴気孔を間近に覗きこむことが出来る楽しみがある。しかし、この天気も一日限りで翌日から再び荒れた日が続いた。スプリカムイによる一時の恵みであった。		
4	太古の流れ	黒 田 豊
万太郎谷は、万太郎山から茂倉岳の国境稜線を源を發する越後側のもっとも大きな谷である。本谷やイロゴヤ沢を登り詰めた、40年前の頃を思い出しながら沢床を歩き、のんびり撮影を楽しんだ。水面は深緑を映してグリーン色に染まり、深く刻まれた一枚岩は太古の息吹を感じさせてくれる。		
5	厳寒のクリスタル	鈴 木 進
人の気配の無い雪道、静かな水の音を頼りにどのくらい歩いたのだろうか。音をたてて流れ落ちる「動」と冷たく光る氷の輝き「静」の狭間に身を置き、しばし時を忘れる。自然の織りなす造形美の繊細さ…この感動を。独り占めできた満足感で帰路に着いた。		
6	厳冬の赤岳	瀬 戸 口 隆 司
ここ数年、年末年始の南八ヶ岳稜線の天気は、荒れに荒れていた。まったくシャッターを切ることが出来ないまま、5日も沈殿した山小屋の生活は辛い。それでも、ひとたび天気が好転すれば、今までの荒んだ気分も一転する。山岳写真の醍醐味もここにある。		
7	凍てつく溪谷	中 山 眞 吾
雲竜溪谷は稲荷川の上流で、その水源は女峰山、赤薙山である。厳冬になればまわりの小沢や谷に巨大なツララや氷柱ができ、すばらしい景観を見せてくれる。溪谷に朝光が射すのは短い時間。撮影は忙しいが感動の一瞬だ！		
8	夏の終わりに	名 取 洋
世界文化遺産に登録された富士山。8月26日、富士吉田の浅間神社では夏山の終わりを告げる祭りが行われる。富士山での秋の便りはオンタデから始まる。黄色く、赤く、葉の色を変える。表富士と呼ばれる御殿場や富士宮の登山口付近では、いち早く夏の終わりを告げていた。		
9	岩峰の白馬三山	長 谷 川 洋 一
白馬、杓子、鏑の白馬三山は、北アルプス随一の人気の山域である。夏期シーズンは、多くの高山植物が咲き、大勢の登山者で賑わう。稜線は岩稜にもかかわらず比較的緩やかで景色も良く、お花畑の群落が登山者の気持ちを和ませてくれる。		
10	草紅葉	畑 島 淳
山の秋の主演はナナカマドやダケカンバであるが、脇役である足元の「草紅葉」に視点を変えて双六岳周辺の秋を表現してみた。双六の台地に点在するイワスゲを朝日が赤く染め、ミヤマダイコンソウやチングルマなど夏の花々が朱や黄に染まる。直ぐにやってくる雪の前に、別れを惜しむように。		
11	湿原の春	舟 橋 恵 子
雪が融け、峠の除雪が終わるころ高層湿原は、水芭蕉・リュウキンカ・サンカヨウ・きぬがさ草・ショウジョウバカマ等々…春の花が咲き乱れる。花の覗く木道歩きはことさら楽しく、少し痩せ不揃いな水芭蕉がとても愛しく感じられる。		
12	雲間に起つ	前 羽 光 雄
天空に広がる大海原。突如その勇姿が、しかし儂くも吞まれてゆく。神々しくそびえ起つが、日々微笑かけてはくれない。天空の一期一会。素晴らしき槍ヶ岳。		
13	春山の雪面	松 原 貴 代 司
稜線の雪面は春を迎えると、厳冬期の鋭角的な形状から、登山者や雷鳥を優しく迎え入れる円みを帯びた形状に変える。それは、気温・風力や降雨状況に合せ、筋状であったり、ゆるいザラメ状や、やや気温が下がると固いザラメ板となり、季節の変化を私たちに確実に伝え、そして楽しませてくれる。		
14	裏剣盛夏	道 健 一
裏剣、仙人池の朝。モルゲンロートが終わり、十六夜月が剣の頂上に落ちるのを眺めてから池の平へ。途中には、スノーブリッジが残り、平の池はまだ雪溪に埋まっている。雪溪の周りでは、雪解け水で出来た小さな池塘が剣岳を映している。目を転じると後立山連峰へと続く緑の木々が眩しい。		
天空の独峰 (特別展示)		故 細 野 弘